

セラミック九州

佐賀県立九州陶磁文化館報

No.48

発行 2012.3.31

編集 佐賀県立九州陶磁文化館

代表者 鈴木 由紀夫

〒844-8585 佐賀県西松浦郡有田町戸杓乙3100-1

TEL.0955-43-3681 FAX.0955-43-3324

http://www.pref.saga.lg.jp/at-contents/kanko_bunka/k_shisetsu/kyuto/

E-mail:kyuto@pref.saga.lg.jp



いろえかいづくしもんおおざら
色絵貝尽文大皿

館蔵資料 (57-0260) 矢野量彦氏贈

初代松本佩山 (1895~1961)

昭和26年 (1951)

口 径： 31.6cm
高 さ： 4.3cm
底 径： 18.4cm

初代松本佩山は有田出身の陶芸家で、昭和期の戦前から戦後にかけて、帝展や文展を中心に活躍しました。その卓抜した製作技術と斬新なデザイン力は誰しもが認めるところでしたが、中央の名声からは無縁に終り、孤高の陶芸家、反骨の陶芸家と言われました。

この作品は見込み中央に栄螺や法螺貝などの巻貝や二枚貝を色鮮やかな色絵で描いています。高火度色釉で文様を表す釉彩をはじめ、有明海の干潟の泥土を陶土に利用するなど創意に富んだ技量を発揮しましたが、同品は有田の伝統的な色絵の技法を採用しており、リアルな貝尽文を周縁部の花菱文の帯で引き締めています。

昭和30年以降、いっさいの展覧会から離れましたが、油滴、木葉天目茶碗を焼くなど晩年まで旺盛な制作意欲を見せ、昭和36年、66歳で亡くなりました。

平成24年度特別企画展のお知らせ

「将軍家献上の鍋島・平戸・唐津-精巧なるやきもの-」展

○趣旨

江戸時代は将軍を頂点とする幕藩体制が徳川三代で築き上げられました。この幕藩体制維持のために制度化されたのが参勤交代ですが、加えて例年献上が諸大名に義務付けられました。その中で7藩程度の大名が陶磁器の例年献上を課せられました。このような最高権力者が求める焼き物が近世陶磁器の中で重きをなしました。肥前地方は将軍への例年献上に関わる陶磁器として、佐賀藩の鍋島焼、平戸藩の平戸焼、唐津藩の唐津焼があり、全国一の例年献上の陶磁器がひしめく地方です。この地域で最高権力者が求める陶磁器を採算度外視で作った理由と、製品の特徴などを紹介する初の展覧会です。

○主催 佐賀県立九州陶磁文化館

○会場 佐賀県立九州陶磁文化館
第1・第2・第3展示室

○会期 平成24年10月6日(土)～11月25日(日)
51日間

○休館日 会期中無休

○出品点数 200点(予定)

○展示構成

- 鍋島 1.鍋島焼の誕生
2.五代将軍綱吉時代-鍋島焼の盛期
3.八代将軍吉宗の儉約令-盛期の終り
4.十代将軍治茂好み-後期鍋島

平戸 平戸焼の誕生と発展

唐津 唐津藩の茶碗献上

○観覧料 有料

○展示解説 毎週土曜日 14:00～15:00

○記念講演 10月20日(土) 13:30～15:00(予定)



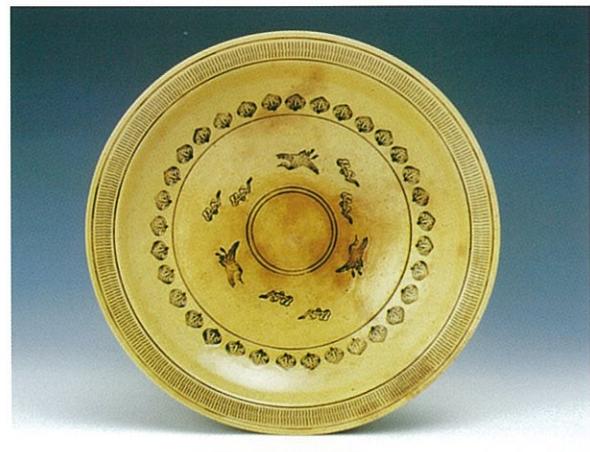
色絵薄瑠璃唐花文菱形皿
肥前・鍋島藩窯 1660～80年代



染付銀杏文大皿
肥前・鍋島藩窯 1700～30年代



染付草花文皿
肥前・三川内窯 享保8年(1723)



象嵌雲鶴文大皿
肥前・唐津焼 18世紀末～幕末

新収蔵品展 I

寄贈記念 澤田痴陶人の世界

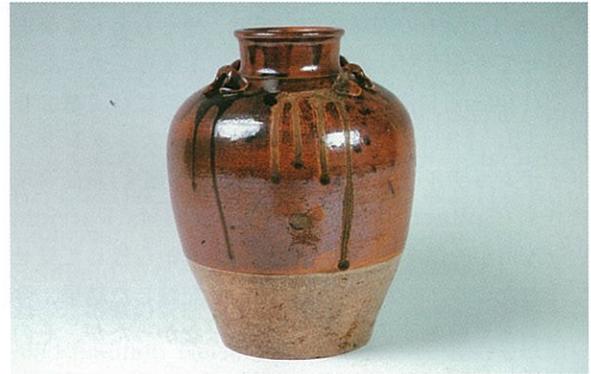
- 会 期 平成24年5月19日(土)～6月17日(日)
- 内 容 澤田痴陶人(1902～77)は京都出身の陶芸家・デザイナーで、三重や岐阜、佐賀県伊万里で活躍しました。平成23年度に寄贈を受けた痴陶人の陶磁器や絵画などを展示します。
- 展示数 150件 200点 (予定)
- 会 場 第1、第2展示室



染綿瓢形瓶文大皿
澤田痴陶人 1960年～70年代
澤田明子氏贈

新収蔵品展 II

- 会 期 平成24年6月23日(土)～7月16日(月)
- 内 容 平成23年度に寄贈を受けて、新たに館蔵となった古陶磁などの作品を展示します。
- 展示数 200件 230点 (予定)
- 会 場 第2展示室



褐釉黒釉流四耳壺
信楽 17～18世紀
爲近美榮氏贈

テーマ展 夏休みやきもの水族館

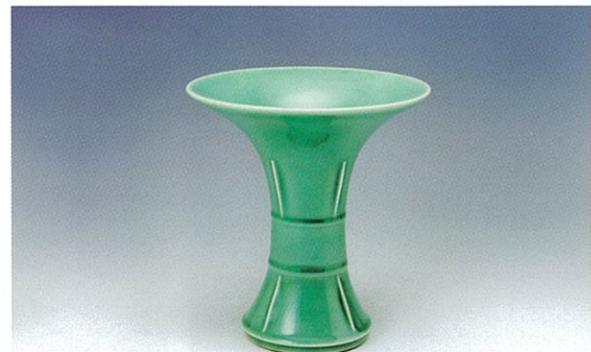
- 会 期 平成24年8月4日(土)～9月2日(日)
- 内 容 魚や貝、蟹、海藻など水族館を思わせるようなさまざまな水の中の生き物が描かれた陶磁器を展示します。
- 展示数 50件 60点 (予定)
- 会 場 第1展示室



染付魚文魚形皿
肥前・有田 1690～1730年代
柴田夫妻コレクショ VI-262

テーマ展 新春展 花の器

- 会 期 平成24年12月14日(金)
～平成25年1月14日(月)
- 内 容 江戸時代から近現代の花生や花瓶、植木鉢など、さまざまな陶磁器の花の器を展示します。
- 展示数 40件 50点 (予定)
- 会 場 第1展示室



青磁觚形瓶
肥前・有田 1690～1730年代
白雨コレクション

ヨーロッパの肥前陶磁器を訪ねて8 英国の肥前磁器コレクション6

Hizen Porcelain in the UK
ニューヘイルズ (Newhailes) その2

TANAKA, Shigeko

田中 恵子

- 日本アジア協会副会長
- 東洋陶磁学会 (日本) 会員
- The Oriental Ceramic Society(London)会員

ニューヘイルズはスコットランド (Scotland) 南部のエディンバラ (Edinburgh) の東7kmの海辺の町マッスルバラ (Musselburgh) にある17世紀後半の館である。セラミック九州No.44 (2008.3.31) に、2002年9月の調査の結果を報告したが、他の貴族の館では殆ど見られなくなった、四方の壁面を天井際まで主に東洋陶磁で埋め尽くしたチャイナ・クローゼット (China Closet) の陶磁については、壁から外して裏面を見せてもらうだけの時間がなく、未報告であった。

2011年9月に9年ぶりにエディンバラに行く機会を得、12、13日の2回、午前中だけ、スコットランド・ナショナル・トラスト (以降NTSと略す) 蔵品管理責任官 (Collections Care Officer) Ms. Patricia Wigston が時間を割いてくれ、順次壁から外して見せてくれたのを、一人で撮影、採寸、記録した結果、今回もあまり数多くは見る事が出来なかったが、その報告をしたい。

Ms. Wigstonによれば、この小部屋の大きさは約10フィート×8フィート9インチ、陶磁器の数は337個とのことである。あまり鮮明ではないが、セラミック九州No.44には壁面の写真を3枚載せてあるので、今回の別の壁面の写真 (図1、5) と併せて見ていただきたい。

全体の印象は、17世紀後半から19世紀に中国と日本で生産され、スコットランドの貴族の館にまで運ばれた東洋陶磁のヴァリエティが見られるということである。

ある。当時、ロンドン経由でなく、オランダから直接、エディンバラの港であるリース (Leith) に荷が運ばれたとのことで、その港に最も近い館の一つであるニューヘイルズには、新しい荷の到着の知らせはいち早く届いたことと思われ、スコットランドの他の地域の館に比べて肥前の種類が多い。しかしイングランドの館で時に見られる1650~60年代の肥前の染付は見当たらず、早いものとしては1670~90年代の広義柿右衛門様式の皿 (図2、3) やカップ (図4) などがあるが、イングランドのエセックス州 (Essex) サフロン・ウオードン (Saffron Waldon) にあるオードリー・エンド・ハウス (Audley End House) には、図2の文様の皿5枚とカップ5個があるのに対し、ここには同じ文様のカップはなく、現在5枚ある皿はInventoryの番号から推して、少なくとももう1枚あったと思われる。(図1)

そのあとに肥前の色絵、中国の伊万里写しが続き、やがてずっと時代が下がると思われる皿までが天井近くに見られる。肥前の皿の中には、いわゆる輸出用の染付に赤金の装飾ばかりでなく、緑、黄、青紫など多色の加飾が見られる上手の皿も多く混じっているのが目につき、これらの大皿類がいつの時点で、この家に入ったのか、興味あるところである。

小さなカップ類は肥前、中国のに混じって、柿右衛門風の小花を散らしたマイセンのマークが入ったカップ類もあり、中国の染付のチョコレートカップや中国伊万里の色絵のチョコレートカップやその蓋類、東洋、



図1



図2 広義柿右衛門様式のソーサー
21.4029.2.a&b.21.4033.2a&b
口径 10.7~10.8 cm 高さ 1.8 cm 底径 5.8 cm



図4 広義柿右衛門様式のカップ
21.4208と21.4209
口径 7.0~6.5 cm 高さ 4.5 cm 底径 3.0 cm



図3

西洋のティー・ポット、人形や動物、鳥も棚に並んでいる。

なによりもこの9年間、気になっていたのは2対の色絵の皿である(図6~10)、1700年~30年代。前回、微妙に雰囲気の違い二対の、染付に赤金の装飾が施された皿の裏面の写真を管理事務所で見せてもらうと、二対とも一枚には目跡があるが、もう一枚には目跡がない。今回この2対のうち、まず、壁面の下の方であって、取り外しやすい1対を見せてもらうと、目跡のない方の皿の高台の径が1cm小さいだけで、あとは大きさは変わらない(図6)。翌朝、今度は壁の上の方に架けてある一対(図7)を梯子を使って取り下ろしてもらい、4枚並べて見ると、裏文様は目跡があるものの方が少し筆数が多いかと思われるぐらいで、目跡があるもの同士、ないもの同士、恐らく別の同じ工人による裏絵付けと思われる(図9)。ここで目跡のあるもの同士を1対として蔵品目録に登録しておらず、昨日外して見せてもらった一対(図6)は21.4079.2aと2bで、2aに目跡があり、壁の上の方の1対(図7)は21.4061.2aと2bで、2bに目跡があるというように、この4枚が2組の離れた番号で登録されており、この家に入った時期が違うということを示しているのかもしれない。

表の文様についても同様に、目跡のある方の2枚の皿の文様は、縁回りのパルメット(palmette)または stylized peony「様式化された牡丹」と呼ばれる12の文様の染付による描き方から、同じ工人の手になる

ものと思われ、目跡のない方の2枚の皿も、また別の同一工人の手によるもののように見える(図8)。その染付のパルメット文の間に赤金で描かれた唐草文はどこで施されたものであろうか(図10)。

染付のパルメット文については柴田夫妻コレクションIV-113に類例があり、またその間に赤金で描かれた半円形の唐草文についても、有田磁器にその例があると、九州陶磁文化館の特別学芸顧問大橋康二氏よりご教示をいただいた。

この6月にまた、エディンバラに行く用事があり、調査が続けられればと願っているが、有田からどなたか調査にいらして下さり、私一人ではいつ終わるとも知れぬ量の東洋陶磁の調査を、一気に終わらせていただくことはできないだろうか。

今回の調査に関して、長年の友人であり、そもそものコレクションを見に来るようにと1997年に招待してくれた当時NTSの募金担当理事のMr. Julian Birchallが、今回はNTSの副理事長(Deputy Chairman of the Board for National Trust for Scotland)となっており、事前にニューヘイルズを訪ね、この家の管理責任者(Property Manager)であるMs. Rhiannon Naismithに私の調査への協力を依頼してくれ、調査自身は前述のNTS蔵品管理責任官のMs. Patricia Wigstonが立ち会ってくれて、行うことが出来たこと、写りの良くない写真を見て下さり、ご指導下さった九州陶磁文化館の皆様のご好意に心からの感謝を表したい。



図5 一対の大皿 21.4141.2.a&b
口径 31.5 高さ 5.5 cm 底径 17.8~18.8 cm
一対の長頸瓶 21.4139.2.a&b
高さ 24.8 口径 2.0 cm 底径 6.8 cm



図7 左21.4061.2aと右2b、2bに目跡あり



図8 下段は図6と左右入れ替り、右の2aに目跡あり



図6 左21.4079.2aと右2b、2aに目跡あり

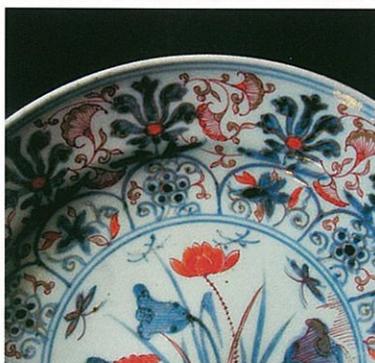


図10 図8右下の21.4079.2aの一部拡大図



図9 口径 21.5cm 高さ 3.8 cm 底径 10.5~11.5 cm

平成23年度特別展の報告

「海を渡った古伊万里～セラミック・ロード～」展

- 主催 佐賀県立九州陶磁文化館
- 会場 佐賀県立九州陶磁文化館
第1・第2展示室
- 会期 平成23年10月1日(土)
～12月4日(日)44日間
- 休館日 月曜日 ※10月10日、11月21日は開館
- 後援 朝日新聞社
有田焼創業400年事業実行委員会
- 写真協力 白谷達也氏
- 展示内容

17世紀の初期に佐賀県の有田で、日本ではじめて磁器が焼かれました。有田磁器は一般には「古伊万里」の名で知られ、17世紀の後半からはオランダ東インド会社の船に大量に積み込まれ、世界各国へと輸出されました。その輸送の際、長崎・出島からヨーロッパ各国へ古伊万里を運んだ航路のことを、「セラミックロード」といいます。

華麗で優美な色絵の古伊万里は、ヨーロッパの人々

の間でブームとなり、また東南アジアにも多数輸出されるなど、全世界に広がりました。当時輸出された古伊万里の数は、公式記録でもその数300万個以上と言われており、古伊万里に対する世界的熱狂ぶりがかえります。

展覧会では、館蔵資料の中から選定した古伊万里作品に参考資料を加えて総計165件202点の作品を展示・紹介しました。

- 観覧料 無料
- 関連行事
 - 記念講演会10月22日(土) 13:30～15:00
「海を渡った古伊万里」
大橋康二(当館 特別学芸顧問)
 - 記念茶会 11月5日(土) 12:00～
 - 展示解説 10月8日(土)、11月5日(土)
14:00～15:00



展示風景



展示解説の様子

第108回 九州山口陶磁展

- 会期 平成23年4月29日(金)～5月10日(火)
12日間

明治29年に「有田陶磁品評会」として発足した本展覧会は、九州山口各県の優れた陶磁器作品を一堂に展示し伝統的工芸の継承と陶磁器産業の発展を期することを目的として開催され、今回第108回目を迎えました。

今回の展覧会では、第1位の山口淀氏の「窯変銀扁壺」をはじめ、100点の入賞・入選作品が展示されました。



第1位 文部科学大臣賞
山口淀 窯変銀扁壺

テーマ展 高取邸 もてなしの茶会

○会 期 平成23年5月14日(土)～6月12日(日)
26日間

旧高取邸は、炭鉱王として知られる高取伊好氏が明治38年に唐津の城内に建てた住宅で、現在、国の重要文化財になっています。この邸宅で賓客をもてなし、茶会にも使われた多種多彩なやきものうち、異国情緒豊かなオランダや中国の器は長崎育ちの志那夫人が好み、子息の九郎氏は朝鮮のやきものを愛でたと伝えられています。

今回、旧高取邸で用いられた遊び心を感じさせる器42件50点を展示しました。また5月21日(土)には「阿蘭陀の器でいただく はいから茶会」と称した茶会も開催しました。



展示状況

新春展 干支 龍の文様

○会 期 平成23年12月16日(金)
～平成24年1月15日(日) 26日間

平成24年の干支である辰(たつ)に因んで肥前磁器を中心に龍の文様の陶磁器を展示・紹介するもので、17世紀前半の雲龍文を描いたいわゆる初期伊万里の壺をはじめ、17世紀後半の柿右衛門様式の色絵龍虎文輪花皿、18頭もの龍を染付と色絵赤・金で描いた18世紀の輸出伊万里の色絵龍文大皿、また呉須絵で雲龍文を描いた19世紀の唐津焼の広口瓶、明治期の有田焼の色絵筒形大瓶など多彩な龍文の陶磁器46件60点を展示しました。



展示状況

新収蔵品展

○会 期 平成23年5月14日(土)～6月12日(日)
26日間

平成22年度に寄贈を受け、新たに館蔵となった唐津焼の象嵌花文大鉢などの古陶磁、13代今泉今右衛門や村島雪山の現代作など223件282点を展示しました。



展示状況

テーマ展 見つけよう やきもの昆虫採集

○会 期 平成23年7月30日(土)～8月28日(日)
26日間

昆虫は、奈良・平安時代から書物に登場したり、実際に観賞の対象として愛玩されるなど、私たち日本人の生活に身近なものでした。

やきものにおいても、平安時代の渥美焼に蜻蛉が線彫りされるなど、古くから虫が文様や形として表現されましたが、江戸時代の初めに誕生した有田焼は染付や色絵などの装飾技法が豊かになり、それまでのやきものに比べ格段に多くの昆虫が描かれました。今回の展覧会では、江戸時代の初期伊万里から、“裸の大将”で知られる放浪の画家山下清や13代酒井田柿右衛門などの現代作品まで62件101点を展示しました。

また8月5日(金)、6日(土)には、やきものに描かれた昆虫をスケッチしたり、やきもののジグソーパズルを楽しむなどの夏休み子どもイベントも開催しました。



夏休み子どもイベントの状況

シリーズ やきものの技法(43)

せん
線 が 描 き と だ
濃 み

染付は、青色の絵具「呉須」で白磁に絵を描いた青と白のコントラストが美しい焼物です。まるで紙に水墨画を描くように豊かな表現ができます。主に輪郭線を引く線描き、面を塗る濃みの2種類の技法によって文様が描かれますが、特に、技術発展の著しい17世紀の有田焼にとって、この2種類の文様描写は年代や窯の特徴を表しやすいといえます。

1610～30年代、初期の染付は線描きの太さや濃度が一定せず、線描きと同程度の濃さの濃みで雑に塗られるため、文様は不明瞭です。1630～40年代、線描の幅は依然太いものの、ほぼ一定に描かれることが多くなり、2種類以上の濃みを塗り分けた製品もみられるようになります。(写真)

1650年代以降、線描きは一定幅を基本としながら、文様の種類に応じて線種を使いこなすことができるようになります。濃みの濃度は線描きより薄まり、均一な濃さで広い面を塗れるようになります。この頃から、窓絵や主文様などの輪郭線に、同じ下描き線を何度も転写できるトレーシングペーパー、伸立ち紙を用いた製品がみられるようになります。

1650～60年代、線描きはさらに細くなり、筆特有のしなりや先細りを生かした繊細な表現が多くみられるようになります。ほかし濃みも多用されて文様描写の技術が飛躍的に向上し、表すことができる題材が一気に広がりました。従来、文様の種類は表現の制約上、外形と陰影の明確なものが選ばれる傾向にありましたが、ほかすことにより、文様を無理にデザイン化せずに表現しやすくなったといえます。

1660～90年代、染付技術はピークに達します。線描きは描かれていることが遠目に見て分からないほど細くなり、ほかし濃みは物の距離や陰影のような凝った描写がみられるようになります。伸立ち紙も、葉脈や羽先などの細かい描写に用いられる例が柿右衛門窯の精製品でみられるようになります。このように発展した民窯の高度な染付技術は、次の盛期鍋島へ採り入れられ、更に洗練されていきます。(山本文子)



染付唐人文変形小皿 肥前・有田
1640年代 柴田夫妻コレクションVII-42

シリーズ やきものにみる文様(43)

え
海 び
老 文

エビは甲殻綱十脚目のうち長尾類に属する節足動物の総称。腹部に7つの関節があって自由に曲がり、頭部に2対の触角があり、日本人にはよく馴染みのある姿です。イセエビなどの海底を歩行する大型のエビ類を「海老」、「螯」または「蛸」、サクラエビなど海中を泳ぐ小型のエビを「蝦」、「鮎」または「鰕」と表記すると言われますが、実際にはそこまで厳密に使い分けているわけではありません。

海老文は、中国では腰が自由に曲がり、跳ねる力が強いことから、物事が順調に進んで運気がよいことを寓意し吉祥文様のひとつとされていますが、日本ではむしろ腰が曲がるまで長生きするというで長寿の象徴としての意味合いの方が大きいようです。

中国明末の古染付などに海老を描いた皿や碗などが見られ、肥前磁器でもこの影響を受けて、多くはありませんが初期から海老文が描かれ、窯の辻窯跡(武雄市山内町)出土陶片などに見ることが出来ます。

写真の作品は口径21.3cmの中皿。見込み染付圏線内に腰を曲げた大型の海老が描かれており、1650年代頃の作とされています。古陶磁研究家の山下朔郎氏が以前にその著作で、石川県立美術館で所蔵する古九谷様式の色絵海老文大皿と類似する意匠であると指摘された中皿と同じ皿であり、氏の古九谷伊万里説を実証する例のひとつとされました。

ちなみに肥前磁器に描かれた海老文は、写真の例のような大型のエビを描いたものと、テナガエビのような比較的小型のエビを描いたもの大きく2パターン見られますが、18世紀以降は、単独で用いられることは少なくなり、蟹や魚などと同様にモチーフのひとつとしてさまざまな文様と組み合わせて用いられることが多いようです。(宇治 章)



染付海老文皿 肥前・有田
1650年代 柴田夫妻コレクションII-64